



## 子ども時代の空間体験

津守 真

上を見る―下から上に登る斜面の空間―希望を生み出す空間

T夫は登園すると私の手をつないだ。庭に歩いて行き、庭の片隅でうずくまり、うーと低くうなるような声を出していた。私は何かすることがありそうに思いながら、一緒にじっとしていた。T夫が三輪車に関心をもっているのが分かったので、それを近寄せた。T夫は自分の手で車輪をいじりはじめた。そうするうちに彼の心が解放されて、上方に向かうゆとりができたのだらう。急に滑り台の下から上を見上げて登ろうとした。私はお尻を支えて上った。T夫はしっかりと手すりにつかまって上る。上までゆき、滑り降りようとしたがひとりではこわいらしく、私の身体の向きをあちこちにかえて、どうやったら私にうまくつかまって滑れるかを試みた。私は先



に滑り、T夫は私の首にしっかりつかまってゆっくり滑りおりた。滑り台を下から登っては私につかまって滑り降りるのを十数回も繰り返し返した。終わり頃には、もう私の首につかまらないで、足の先が私の背中に触れるだけで滑った。手には登園したときから持っていた小さなプロペラをしっかりと握っていた。何度目か上ったときに、そのプロペラを滑り台の上から下に放り投げた。彼は手を放すのにも、意志的に強く放すのである。

プロペラはドライエリアの溝の中に落ちた。自分では取りにいられない遙か下の空間である。するとT夫はうーとうなって動かなくなった。私が下からそれを取って来るとまた動き始めた。この日の午後、別の子どもと肩を並べて、同じ場所でミニカーや電車を他の子が持って行っても怒らなかつた。

この場面で子どもは自発的に動き始めた。そこに現れた結果としての行動は小さなものだが、この保育の過程の中にこの子ども自身の成長の姿が現れている。子どもが低い声でうなっているときには、目は下を向いている。おそらく子どもにとっては何に手を出して良いかも分からないし、何にも手が出せなくて、閉じ込められた空間の中にいて、目を上に向けて余裕もなかったのだろう。三輪車の車輪を回しているうちにこの子は回るものが好きである。子どもの心は解放されて上方に目を向ける余裕ができた。子どもは外に向かって広がりゆく空間があることに気が付いた。

子どもが滑り台を下から上に登ることに関心を示したとき、上方の空間を発見し、



未来の時間を希望をもってみるようになったと言える。

人間の空間は身体と深く関係している。前、後、上、下、左、右は、直立した身体を基準にしている。そのことは時間とも関係するし、人の感情とも関連する。前進する方向は未来を指し示し、前の上は、希望の感情を伴う。前の下は墜落する淵であり、前進に伴う不安である。後は自分が歩んで来た道であり、過去のさまざまな感情を伴っている。

### 日常的観察

日常の空間では私共は平面の上を歩いている。

歩くとき、人の目は、目的に向かって前方を見ている。目的に向かっているときには道が多少上り坂でも下り坂でもほとんど問題にならない。自動車を運転する人は歩行者よりもっと目的に直線的に向かうから、斜面は一層問題にならないだろう。目的なく散歩するときには、道端の景色やわずかの坂道もその本来の姿をあらわす。坂の上の空は明るく、坂下の屋根は暗く見える。上り坂をゆくとき、歩くのに困難があっても頂上に到達する楽しみがある。

物思いに沈んで自分の問題にとりつかれて歩いているときには、空を流れる雲、輝く青空に気が付かない。一息入れて空を仰いで見れば、空は高く無限に広がっていることに気が付き、自分が何と小さなことにとらわれていたかを思い知らされる。私は



ある時期、自分の問題にとらわれて過ごしていたとき、ふと、このことに気が付いたことがあった。詩篇にも「われらは火の中、水の中を通った。しかしあなたはわれらを広い所に導きだされた」と言っている。上を見上げるとき世界は広くなる。

足の下の空間は地面で埋まっているから、空とは違って下を透き通して見ることができない。ところがあるときに突然足元の地面が割れて、すぐ目の下に絶壁の底が見えたとするとうなるだろうか。そのときには目がくらみ、下に落ちないかという不安におののくだらう。そういう上と下の空間に気が付いたとき、子どもの空間が広がったといえる。

いま、T夫は滑り台で上に登っていきこうとした。私は子どもがしようと思っていたことを助けたいと思い、お尻を押して上った。そのときこの子の閉ざされた空間は上方に向かって開けたと言えるのではないだろうか。

### 言語と身体認識

上、下、立ち上がる、倒れる、上昇する、落ちるなど、言語の基礎には、身体感覚での上と下の体験がある。これから転義して、精神の世界における言語がこれにあてはめられる。天国と地獄、希望と絶望、いずれも身体感覚における上下の感覚と関連がある。天国は上にある地獄は下にあるということは、だれもほとんど疑わない。現代の人は天国、地獄の存在を信じないけれども、しかし上と下という言葉に伴って

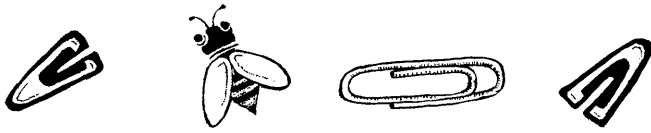


上の方は明るい希望、下の方は底知れぬ不安を表すことに変わりはない。

社会生活においても、われわれは上の立場に立つということを言うし、上の立場に立つと何か偉くなったような気がする。本当はそうではないのだが。高いところに登り過ぎて降りられなくなることドイツ語で *Verstiegenheit* (うぬぼれ) と言う。 *Steigen* は登ること、 *Versteigen* は「登りそこなうこと」、高いところに登り過ぎて降りられなくなるという意味である。身のほど知らずということばは、自分が本当は登れないところまで登ってしまつて、そして降りられなくなってしまうことだとボルノウが「人間と空間」の中で指摘している。子どもは自分の力で登れた所は自分で降りることができが、登りたいからといって大人が支えて登らせたときには危険が伴う。自分の足で登れるところは自分で降りることができるのである。

### 発達の観点

赤ん坊はいつ上を仰ぎ見るようになるだろうか。子どもが寝ている状態から膝ますいて、そして立ち上がるようになったとき、子どもは自分の身体を基準にして上と下の空間を分化して認識する。赤ん坊が立ち上がった時に、自分の顔のあるほうが上で、しりもちをついて倒れる方向が下である。これは体の動きと一緒にできあがる上である。歩いては転び転んでは立ち上がる時に、子どもは一生懸命に上と下を勉強している。そして二歳くらいになると、すっかりそれは自分の身についたものにな



る。

二歳位になると、子どもは滑り台の下から上に登ろうと思う。そう思うときには登る前から子どもには上方空間が観念の中にできている。「うへ」「した」という言葉はまだ意味をなさなくとも、上に登ろうと思う気持ちは明瞭で、子どものなかには身体の水準で上下のイメージができている。三、四歳になると、限られた平面で上下の空間のイメージが生じる。子どもは画用紙の線を基準にして上と下を認識するようになる。上に太陽を描き、下の方には地面を描き、その中間に人間を描く。明らかに視覚の面で、上と下とその中間が子どもにも認識されたことが分かる。

子どもの観点から空間をもう一度考え直してみる。幼児の段階では言葉の転義はあまり意味をなさないだろう。言葉を持たない点で、子どもは大人の精神の世界とは違う。しかし身体感覚での上下は、大人よりもっと生々しく体験されているだろう。大人はそれを言葉に置き換えてしまうから、観念的になって、上は希望、下は絶望というように簡単に観念化するが、実は希望とか絶望というのはそう簡単なものではなく、自分の全生活が本当に明るくなったり暗くなったりすることである。子どもが上方空間を身体感覚で仰ぎ見るときは、天にまで届く高揚した感情があり、下と言ふときは地獄の縁をのぞきこむ目の眩むような恐ろしさを感じるにちがいない。

つまり、大人が言葉で考えることは、子ども時代の身体感覚による空間体験が下敷



きになっている。言語以前の子どもたちの生活に精神生活の芽生えがすでにある。子どもは身体の直接感覚によってもっと生々しく人間の現実を仰ぎ見、またのぞき見ているのではないか。

私は自閉的な子どもを見ていてそんなことをしばしば思わされている。滑り台の斜面を登るといふ小さな行為を、子どもが自発的にするようになったとき、子どもの中には、上方へ、そして未来への明るい希望が生まれて来たのだと言つてよいと思う。そして自分の大好きなプロペラを上から下に落として、手の届かない溝の中に入ったとき、大人が考える以上に子どもは落胆と後悔の中にいるだろう。子どもが落とした物をそんなに親切に取つて来なくてもいいのではないかと考へもあるが、自分自身の身代わりともいえるような大事なプロペラを落としたと考へたとき、私は拾つて来ないわけにいかなかった。そうしてよかつたと思う。この後、この子の世界は急速に開けていった。

子どもが滑り台を下から上に登ろうとするとき、その世界は未来に向かって広がるうとしている。私共はそれを手掛かりにして保育を進める。それはこの子どもに限つたことではない。同様の観察は数多くある。

(愛育養護学校)